人物像から見た『明六雑誌』

松本佳奈
愛知淑徳大学大学院文学研究科文学専攻図書館情報学コース

『明六雑誌』は明六社から発行された日本で最初の学術雑誌のことである。『明六雑誌』について、様々な研究がなされてきたが、内容的なアプローチが多く、『明六雑誌』に関わる人物について数量的にアプローチしたものは少ない。そこで人物に重点をおいた数量的なアプローチをすることにした。調査をするにあたって、『明六雑誌』そのものではなく、数量的に扱いやすい『明六雑誌語彙総索引』や『「明六雑誌」総目録』を中心に利用した。

『明六雑誌』は明六社から発行された学術雑誌のことである。明六社は明治 6（1873）年に発足した日本で最初の学術結社である。明六社では社則を定め、定期的に会合を開き、公開演説会を開催、学術交流だけではなく一般の人々への啓蒙を目指した。そのなかで社員の論文を掲載した雑誌『明六雑誌』が刊行されるようになった。

『明六雑誌』は全 43 冊、156 編の論文が収録されており、初版本と後刷本が存在する。今回のポスターセッションでは後刷本を研究対象としている。大久保利謙によると、初版本と後刷本の違いは、表紙の『明六雑誌』が初版本は『明六社雑誌』となっているものがあり、表紙裏の題言の外枠も違っているが、初版本で欠字となっている部分の組み直し以外、本文の内容に関する違いはない。

『明六雑誌』の論文著者 16 名と論文中に登場した人物名、書名とその著者名の 3 つをそれぞれ分析対象とした。『明六雑誌語彙総索引』と『「明六雑誌」総目録』から、論文の著者、論文数（翻訳を含む）と人物調査を行った。

『明六雑誌』には 156 編の論文が掲載されていた。著者別の論文数の割合は、津田真道、西周、阪谷素と論文の発表が多かった上位 3 人で全論文の 47%になり、執筆者の集中がみられる。翻訳論文は中村正直、加藤弘之、柴田昌吉らが合計で 12 編掲載している。

論文中に 5 回以上登場した人物名は、論文著者を除くと 18 人だった。中国、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカは、日本の人物で、時代別に比較すると、紀元前、11 世紀、16 世紀から 19 世紀の人物だった。

以上のことから、3 人（津田真道、阪谷素、杉亨二）の人物が『明六雑誌』の人物名全体を通して中心人物だと捉えられる。また、様々な人物同士の結びつきがあったことがわかった。孤立している人物もいるが、関係が重なり合っている人物が多かった。このことから、交流の盛んな、学術的コミュニティーが築かれていたことが示唆されるのではないかと考えられる。登場人物名や書名から、国外への関心が高く、新たに交流のはじまったアメリカ、ヨーロッパの『明六雑誌』発行時と同時代の情報だけではなく、中国の古典への関心も深かったと考えられる。